

事例3 社会へのパスポート 「力」

自ら調べ自ら考える力を土台に、 国際人となる資質を育てる

ケース 千葉県・私立 渋谷教育学園幕張中学・高校

「自ら調べ、自ら考える力」をベースに、国際人としての資質の養成を目指す渋谷教育学園幕張中学・高校の教育実践から、グローバル化や価値観の多様化が進む社会でも力強く生き抜いていく人材の育成について考える。

教育理念

「自調自考」の力を伸ばす
国際人としての資質を養う

渋谷教育学園幕張高校の開校は1983年と、歴史は決して古くないが、今や千葉県屈指の進学校として旧帝大をはじめとする難関大学に多くの生徒が輩出する。その教育活動を象徴する理念が「『自調自考』の力を伸ばす」だ。86年の附属中学校の開校以来、中高一貫教育を通して、「自ら調べ、自ら考える」という自主性を育み、自分の力で豊かな人生をつくり上げていく生徒の育成を目指す。進路部長の山崎弘一先生は、次のように説明する。

「『自調自考』の力が十分に備わっていれば、どのような状況でも自分の生き方を見つけられます。自分の進路を考えて実現に向けて努力するのも、生き方を見つけることに他ならないと考えます」

国際人としての資質を養うことも教育目標の一つだ。外国語を操り、海外との交流を持つ以前に、自分や日本のことを理解して自信を持って主張できる、そして異なる考えを持つ相手の話に耳を傾け、協力して物事を進められる。そのような人材が同校の考える国際人だ。

こうした教育方針は、開校時、「21世紀の社会で活躍する人材を育てる」という視点から策定された。グローバル化や価値観の多様化が急

速に進む中で、卒業生が海外の大学を含めた多様な進路を選択し社会に羽ばたく姿を見て、同校の教師は教育実践に手応えを感じている。

教育実践1

教師が考える観点を与え
生徒に自力で考えさせる

全校の教育目標は、学年ごとに具体的な方針に落とし込まれる。現在の高校2年生は、入学当初、学年主任の井上一紀先生が中心となり、「自分自身が何か一つ決めたことを限界まで頑張る」「世界の動きをしっかり見る」という方針を決め、これを学年集会で生徒と、保護者集会で保護者と共有。学年が一九となって目標に向かう雰囲気をつくった。その

渋谷教育学園幕張中学・高校

◎千葉県幕張新都心に位置する。1986年に附属中学校を開校し、中高一貫教育を開始。教育目標は、「自調自考の力を伸ばす」「倫理感を正しく育てる」「国際人としての資質を養う」。多様な留学プログラムや留学生の受け入れなど国際交流が活発。帰国生も積極的に受け入れる。

創立 1983 (昭和58) 年 形態 全日制/普通科/共学 生徒数 1学年約350人

10年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、東京大47人、京大7人、一橋大12人、東京工業大6人、千葉大39人など185人が合格。私立大は、早稲田大173人、慶應義塾大149人、上智大51人、明治大74人など延べ877人が合格。海外大は延べ25人が合格 (07年から10年の合計)。

住所 〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉 1-3 電話 043-271-1221

Webサイト <http://www.shibumaku.jp/>



井上一紀
Inoue Kazunori
渋谷教育学学園幕張中学・高校
2学年主任



山崎弘一
Yamazaki Koichi
渋谷教育学学園幕張中学・高校
進路部長



豊島幹雄
Toyoshima Mikio
渋谷教育学学園幕張中学・高校
国際部部长

上で教師の考えや生徒の実態を踏まえて教育活動を検討している。まずは教育目標の一つである「自調自考」の力がどのような教育を通して育つのか、実践を追ってみよう。同校では、「スポーツフェスティバル」(体育祭)や文化祭などの学校行事は、生徒が企画から運営までを担当するなど、「自調自考」の実践の場となっている。その方針がより強く表れているのが、校外研修や宿泊研修など社会との接点が多い校外活動だ。

校外活動は、原則として中学1年生から現地集合・解散で、研究テーマごとに編成したグループ単位で行動する。早期から生徒の自主性に委

ねられるのは、緻密な事前学習があるからだ。事前学習では一人ひとりの生徒が興味・関心に応じて研究テーマを設定し、グループごとに見学コースや研究内容を詳細に検討して、分刻みのスケジュールを作成する。そして計画書を提出し、教師の承認を求める。

「最初から教師を納得させる計画書を作成できる生徒は、ほとんどいません。それでも、教師は手直しをせず、『本当に時間内に回れるのか』『研究テーマを十分に深められるのか』と生徒が気付いていなかったことに気付かせたり、考える観点を与えたりして、最後まで生徒自身に考えさせます」(山崎先生)

グループでの話し合いも、最初からスムーズに進むとは限らず、なかなかまとまらなかったり、衝突したりすることもあつた。しかし、完成を目指して計画書を共同で練り上げる作業を通し、次第に協調性やコミュニケーション能力を体得する。

見学先に電話をかけてアポイントを取る作業も生徒が担当する。時には、「忙しいからかけ直してほしい」と言われたり、訪問を断られたりし

て再考を迫られることもある。そのような体験から、「自分の思い通りにならないこともある」と実感し、相手の立場から物事を考えられるようになっていく。井上先生が話す。

「思い通りにならない体験をすることで、親切にされたときの感謝の気持ちが大きくなり、学校に帰ってから自発的に礼状を書く生徒も出てきます。社会とのかかわりから、人として大切な姿勢を学んでいます」

高校2年生の中国への修学旅行前には、中国の歴史を授業で重点的に学習するなど、校外学習と教科学習

とのつながりも意識し、幅広い教養の習得を目指す。また事後学習では、各自がレポートを作成。他の生徒に向けた発表の場を設け、プレゼンテーション能力の育成につなげる。

更に日々の教科学習によっても、自分で調べ、考える力が育っていく。「どの教師も当たり前のように生徒に考えさせる指導を重視しています。例えば、理科では他校に比べて実験の比重がとても大きいですし、私が担当する国語では、書くことをいとわない生徒を育てたいと考えています。そのように教師の方針が一貫しているのは、生徒に付けたい力がしっかりと共有されているからでしょう」(山崎先生)

高校1年生から約1年半をかけて取り組む「自調自考論文」も、「自調自考」の力の育成には欠かせない学習だ。テーマは基本的に自由で、裁判員制度を研究する生徒もいれば、日米のユーモアの感覚の違いを調べたり、「オタク文化」を追究したりする生徒もいる。分量に明確な決まりはないが、A4用紙10枚程度が一般的で、30枚以上のものもある。最初に授業時間を使って論文の構



ニュージーランド研修でマオリ文化の説明を聞く

成やルールなどを一斉指導した後
は、昼休みや放課後など各自が時間
を見つけて取り組む。ほとんどの生
徒は何度も書き直す必要があり、そ
れほど時間的なゆとりがあるわけ
ではない。完成までは個別指導が中心
となるため、学年間で協力し、すべ
ての教師が学年の垣根を超えて常時
10人ほどの生徒を受け持つ。昼休み
や放課後に個々に面接し、進捗状況
を確かめたり相談に乗ったりして
フォローするが、ここでも生徒に考
えさせる指導が基本だ。国際部部長
の豊島幹雄先生が説明する。

「面接を繰り返して、『この記述の根
拠は何か』『他の章とのつながりは
適切か』など、客観性や説得力の観
点から、かなりハイレベルな指導も
します。中には途中で行き詰まる生
徒もいますが、教師は答えを提示せ
ず、生徒が自力で考えるのを根気強
く待ちます」

最初は教師に頼ろうとする生徒も
いるが、やがて「自分が考えなけれ
ば先に進まない」と気付き、粘り強
く考え始める。前向きな気持ちに
なった生徒は、書籍やインターネット
での資料集めにとどまらず、アン

ケート調査をしたり、大学の教授に
取材をしたりすることもある。また
膨大な情報を取捨選択する作業を通
し、クリティカル・シンキングの基
礎も培われていく。

「最終的に完成した論文の多くが、
大学生が作成する論文に匹敵するレ
ベルと感じます。産みの苦しみがあ
りますが、やり遂げたときの充実感
や達成感は大きく、自分への自信と
なります」(井上先生)

教育実践2

多様な個性を持つ生徒が 認め合う場づくり

多様性を受け入れ、外の世界に関
心を持つグローバルな意識の育成に
も力を注ぐ。それが「自調自考」の
力と相まって、国際人としての資質
が養われていくのである。

そもそも校内の環境そのものが、
社会の縮図のように多様性にあふれ
ている。常時、さまざまな国からの
留学生を受け入れているほか、学年
の30人ほどが帰国生で、英語を除く
授業やホームルームは一般生(帰国
生ではない生徒たち)と共に学ぶ。
特別活動入試で入学した、スポー

や武道、芸術などに秀でる
生徒も校内で個性を発揮す
る。

「多様な個性を持つ生徒
が認め合い、尊敬し合う場
にしたいというのが、学校
づくりの方針の一つです。
こうした環境で学ぶこと
が、多様な文化を受容する
ベースになると考えていま
す」(山崎先生)

自分とは異なる個性との
出会いから得られる学びは
大きい。例えば、帰国生は
一般生に比べ、自分の意見
を率直に主張する傾向があ
るといふ。お互いが違いを
意識し合う中で刺激し合い、一般生

が自分を積極的に表現するようにな
ったり、帰国生が日本の文化への
理解を深めたりする。また帰国生と
のかかわりの中で、一般生が英語の
学習に一生懸命に取り組むようにな
ることも多い。同校の卒業生で、現
在はユネスコ日本政府代表部に所属
する渡邊晶子さんは、「クラスに十
数人いた帰国生との文化の違いを身
近に感じる事ができた」と、在学

全米高校模擬国連大会に日本
代表として出場



マカオからの高校生との交流会。高
校1年生全員が参加



時代の思い出を校報に寄せている。

長期・短期の留学生の受け入れに
加え、イギリスやシンガポールへの
研修プログラム(いずれも希望者)
や中国・シンガポール等の高校生の
ホームステイ受け入れなど、留学生
と触れ合う機会も多い。今年度の高
校1年生は、ホームルームの年間
テーマの一つを「世界を語ろう」と
し、学年集会で留学生と互いの国の
印象などを意見交換したり、ドイツ

人留学生と共に広島を訪れて平和学習を行ったりした。

「日常生活での接触にとどまらず、深いレベルの交流を通して、外国人と対等に議論する力を育てるため、どの学年にもこうしたプログラムを用意しています」（豊島先生）

毎年、ニューヨークで開催される「全米高校模擬国連大会」への出場を目指す生徒の自主勉強会も、学校としてサポートしている。模擬国連は、世界中から集まった高校生が各国大使の立場になり、実際の国連と同様に議論して決議案を採択する大会で、基本的に英語で進行される。2010年には2人の生徒が日本代表団5校10人の一員として出場し、優秀大使賞を受賞した。

「国際情勢の理解やグローバルな感覚の養成にとどまらず、粘り強く相手を説得する力や状況判断力が育成されるなど人間的にも大きく成長します」（豊島先生）

進路指導

強い意志を持つには

「自分で考える力」が土台となる

同校の進路指導の方針は、まさに

「自調自考」の理念に沿ったものだ。

『「将来何をしたいのか」「何を学びたいのか」を考えさせることが第一です』（山崎先生）

生徒が自分と向き合い、将来の可能性を広げていく機会も豊富に用意している。年1回の進路講演会では、各界で活躍する人物を招き、仕事や人生について語ってもらう。また高校2年生が対象の「大学ガイダンス」では、大学生、社会人、既卒の受験生のそれぞれの立場の卒業生が受験や将来について語る。

年1回、全学年の生徒や保護者を対象に開催される「海外大学説明会」には、国際人としての資質の養成を目標とする同校らしさが表れている。説明会には海外大学在学中の卒業生を招き、リアルな体験を交えて楽しさや苦勞を語ってもらう。

同校からの海外大学進学者は帰国生が中心だが、一般生の挑戦も珍しくない。海外大学向けの進路指導は、生徒に「学びたい」「行きたい」という強い意志があることが前提だ。その上で、授業形態をはじめ国内大それたの違いを説き、「どのような分野を学びたいのか」「その分野を学

ぶには、日本と海外の大学のどちらを選ぶべきか」といった流れで検討を進める。将来的にグローバルな仕事や社会貢献をしたいという意思があるかどうかも重要な点となる。一定の英語力も不可欠だ。

「海外に単身で飛び出していくような強い意志は、自分で考える力が育っていないければ持てません。『自調自考』や国際人としての資質を育てる教育の成果の一端と考えています」（豊島先生）

同校は、進路関係のイベントを中心に、卒業生が来校して在校生に語り掛ける場面が多い。学校生活が充実していたと思えるからこそ、母校に協力したいという気持ちが生まれるのだろう。

「教師が出来ることは限られているかもしれませんが、その分、本校では卒業生が気軽に来校し、生徒のために一肌脱いでくれます。そんな卒業生の輪により、徐々に良い学校になってきました。これからの社会で通用する力が身に付くだけでなく、卒業してからも楽しい思い出と共に母校のことを思い出す、そんな学校でありたいです」（山崎先生）

ベネッセコーポレーション担当者より

**海外進学という
希望進路の実現を
支援する**

高校事業部 首都圏事業推進ユニット
藤井雅徳

社会環境がよりグローバルになり、日本企業の海外展開が加速する中で、高校生の海外大学進学をサポートする「海外進学支援事業」を、今年度、本格的に始動しました。近年、日本人の留学者数は年々減少が続く、いわゆる「内向き志向」が顕著になっています。また、2010年春の卒業生の就職率も60・8%（文部科学省「2010年度学校基本調査」）となり、就職率が5割を割り込む大学も多く存在しています。このような情勢を鑑み、大学選びにおいて「国内進学」だけでなく、「海外進学」という新たな選択肢を用意することで、グローバルな社会で活躍する人材育成を支援したいと思っています。今の高校1年生が社会に出るのは「7年後」、中学1年生であれば「10年後」です。この7年後、10年後といった将来の社会を想像すると、よりグローバル化は加速し、大学選びの基準も大きく変化していくと思われます。私たちは「10年後の社会」を見据え、志と気概を持って、海外進学支援に取り組んでいきたいと思っています。